詩的創作とグリザイユ絵画における一考察

―― ロレンツォ・レオンブルーノによる作例をめぐって

田村 万里子 （東京都現代美術館）

絵画表現におけるモノクロームおよびグリザイユの技法は、あらゆる事象の固有性を示すための色を持たない。その目的は各時代、各作家によって様々である。例えば古代絵画において遠景を描くときに、徐々にその色彩を褪色させたことを辻佐保子は「オリゴクローム」と名付け、中世宗教画における天上世界の表象においてモノクローム空間に聖なる対象を描くことを「不可視世界のモノクロミー」として指摘した。またジョット・ディ・ボンドーネがスクロヴェーニ礼拝堂において大理石を思わせるグリザイユ技法を用いて、浮き彫り作品のような立体感を再現したことはよく知られている。15 世紀にはサンドロ・ボッティチェッリがグリザイユで描いた大理石風の浮き彫りや彫像を画面に挿入することで複雑な主題を構成し、アンドレア・マンテーニャは自らの考古学知識や古代遺物のコレクションに着想を得て、古代という過去の時間軸へと遡る手段としてグリザイユを用いた。古来、画家たちは対象から色彩を取り除くことで、色をもつはずの生身の存在や「此処」という現実空間から次元を違えるための創意を施したのである。

本発表では絵画表現における異なる次元、つまり心的イメージや観念的、詩的寓意の表象においてグリザイユのもつ効果を考察することを試みる。ボッティチェッリによる《アペレスの誹謗》や《ルクレティアの物語》など、画中画のように彫像や浮き彫りが描かれる作例、またマンテーニャによる《ローマへのキュベレ信仰の導入》や《ソロモンの審判》といった「パラゴーネ」の問題に踏み込んだ作例を取り上げる。優れた寓意と主題の構成で知られるこれらの画家に加え、本発表で重要となるのはロレンツォ・レオンブルーノ(1477-c. 1537)に主眼を置くことにある。

レオンブルーノは 16 世紀マントヴァで宮廷画家を務め、パトロンのイザベッラ・デステにフィレンツェやローマで巨匠たちの技術を学ぶよう命じられる。しかし留学から戻った画家が晩年に描いたのは、当時流行していた色彩豊かで艶やかな作風ではなく、マンテーニャの硬質な静謐さを象徴する古典的なグリザイユ画を継承するような作品《アペレスの誹謗（あるいは運命の寓意)》であった。本作における「アペレスの誹謗」と「運命」という古典的主題を組み合わせた複雑な構成、およびその難解な寓意に見られる画家の詩的創造が、グリザイユ技法の選択によって効果的に表象されている。画面上に数多登場する人像とテキスト、逸話と現実という異なる次元と主題を、グリザイユを用いることで同空間に統合させるという意匠は、複雑な寓意を一つの画面に物語ろうとするときにグリザイユがなし得る視覚的効果をよく示している。

本発表では先行するグリザイユ研究においては言及されてこなかった本作を、その伝統を継承する重要な参照項として捉え、優れた独自性を有する作例として位置付けることを試みる。